
東方 龜兔忍

緑野ボタン4号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方 龜兎忍

【NZコード】

N5878Z

【作者名】

緑野ボタン4号

【あらすじ】

メスの亀に転生しました。太古の幻想郷世界からスタートです。
(タグ補足: タートルズの設定をちょっと使っていますが、原作キヤラとかは出ません。ガールズラブの描写はギャグの範囲です)

1話「死後の世界」

人は死ぬと、どうなるのか。

肉体の話ではなく、精神はその後、どうなるのか。

有史以前から存在する疑問だろう。

現代日本に生を受け、冠婚葬祭のときくらいにしか信心を發揮しないなんちゃって仏教を崇拜する俺は、死後の世界なんてものに明確なビジョンなど持ち合わせていなかつた。

しかし、実際に死んでみるとそれは言つていられない。

俺は交通事故に遭つた。乗つていた通学バスが交差点で対向車の大型トラックとぶつかった。何が原因だつたのか、今となつては確かめようがないが、起こつたものをとやかく言つても仕方がない。俺が生きていれば文句の一つも言つただろう。だが、あいにく俺は死んだ。

事故の直後、大きな衝撃で体が吹き飛び、壁に叩きつけられ、それからの記憶があいまいだ。人間、不思議なものでぶつちぎりの恐怖体験に遭遇すると、妙に達観してしまつものなのか。そのときの俺は自分が死ぬことに根拠のない確信を持ち、その考えを冷静に受け止めていた。

そして、現在に至る。

「ぴー、ぴー！」

俺は気がつくと、真っ暗な場所にいた。えらく狭つ苦しい場所だ。その窮屈さに耐えられず、必死に暴れていると、自分を取り囲んでいた壁が壊れた。

外から入つてくる光がまぶしい。目がよくみえない。まぶたが溶接されてしまつたかのようにぴつたりと閉じて開かない。体の様子

も何か変だ。まともに立つことができず、腹ばいになつて前に進むことしかできない。とにかく、まずはここがどこなのか確かめなければならない。

「ぴーー！」

幸い、耳はよく聞こえたが、ぴーぴー泣く声しか聞こえない。動物の鳴き声のような気がする。そのとき、盛大な地鳴りが起きた。何事かと驚いたが、そのおかげで目を開けることができた。光の痛さに耐えながら、ようやく周囲を確認する。

そこには、山があつた。巨大な岩山だ。それだけならまだよかつた。なんと、その山、動くのだ。さつきから響く地鳴りの音、それはこの山の足音だった。

これは何の冗談なのか。振り返ると、俺の後ろにはでっかい卵らしき物が何個もかたまつておいてあつた。ほとんどの卵が割れて、中から人と同じサイズはあるうかという子ガメがわさわさ孵化している。そう、亀だ。あの甲羅を持った爬虫類のアレ。

さつきからぴーぴー鳴いている声はこいつらのものだつた。それにしても馬鹿でかい。なんの怪獣映画だ。いや、でかいのはそれだけじゃない。俺の周囲に生えている植物。木だと思つていたらどうも違う。これは草だ。バナナの木は本当は草だと聞いたことがあるが、そういう種類ではない。どうみてもそこらへんの道に生えていそうな雑草が、何メートルもの高さまで育つていて。あそこに見えるのはタンポポだろうか。黄色い花は小さい物でも座布団くらいのサイズである。

ここまでくればさすがに気づく。これは周囲の物が巨大化したのではない。俺が小さくなつたのだ。信じられないがそう考えるより他はない。どうみてもこれは映画のセットとか、そういう次元に収まるものではなかつた。

そして、なぜ小さくなつたのかと云つと、それについてもだいた

いの推測はついている。いや、気づかないようにしていったと言つべきか。端的に言つと、俺は亀になつてた。子ガメである。俺の周りでピーピー鳴いている奴らと同類である。

「びいいいいいつ！？」

とりあえず叫んでみたが、当然人語は話せそうにない。

落ちついて考えてみよう。これは、仏教で言うところの輪廻転生というものではなかろうか。魂は死後の世界で新たな生を受け、命は巡る。俺はあるの事故で死に、そして次の生を受けてカメになつた。しかし、自分で考えたものの、何とも信じがたい説である。

しかも、俺は前世の記憶をもつたまま転生したことになる。これはどういう仮の思し召しか。ヒトに転生できたならいざ知らず、よもやカメとは。カメに人間の心など不要ではないか。

そんなことを考えていると、地鳴りが止んだ。岩山と思つていた存在が動きを止めたのだ。そいつはカメだった。とんでもなく大きい。俺の体が小さいため、大きく見えると言うこともあるが、隣に生えている草の大きさから目算しても普通のカメの域を超えている。ゾウガメとかそういうレベルじゃない。軽自動車くらいの大きさはある。

そんな存在が現れたなら、普通の人間なら恐怖する。俺もその例にもれなかつた。カメの本能がそうさせるのか、俺は自分の甲羅の中に引っ込んだ。そんなことをしたところでどうにかなるとは思えないが、関係なかつた。とにかく怖い。

しばらくそうしていると、落ちついてきた。俺が何かされる気配はない。恐る恐る顔を外に出す。

巨大ガメが俺をガン見していた。

慌てて甲羅に引っ籠る。

『でーでーーーーー』

「ぴつ！？」

今、声が聞こえた。間延びして聞き取りにくい声だったが、確かに意味をもつた言葉だ。それも、頭の中に直接響いてくるような、不思議な声だった。これは、巨大ガメの言葉だろうか。とすると、カメ語？ そんなものが動物の世界にあつたとは。

『なーんーでーかーくーれーるー？ おーかーあーさーんーだーよー？』

どうやら、この巨大ガメ、俺の母親のようだ。

2話「あつとこづかに時は過ぎ」

それから俺のカメとして生活が始まった。

はつきり言つて、過酷だった。自然界は厳しい。生まれたての赤ちゃんなど、他の動物にとつてかっこうの獲物である。常に捕食の危険にさらされているのだ。子ガメたちは、親ガメの足の下にずっと隠れていなければならない。

幸いにもうちのビッグマザーは、この付近の生態系の中でも上位にいるらしく、天敵と呼べる生き物はいないようだ。名前があるようで、迂木というそうだ。母ちゃんが腰を据えている内は安全である。その甲羅の下に潜んでいれば敵に襲われる心配はない。

しかし、ずっとその場にとどまっていることはできない。エサを確保する必要がある。カメの生態について詳しくはないが、爬虫類だから授乳はしないのだろうな。どうやら、俺たちは雑食のようだ。大人になると草を食べて生きていくようだが、子どものうちは肉しか食べられないらしい。迂木は子ガメたちのために狩りをする。意外なことに動きの遅い迂木にも狩りはできた。しかし、その方法が常軌を逸している。あるとき、水場に集まっていた野ウサギ目がけて口から光弾を発射したのだ。まさに怪獣である。なんでも、妖力という不思議エナジーを使っているらしい。うちの母親は妖怪だった。前からおかしいと思っていたが、どうもこの世界は俺が昔いた世界とは違うのかもしれない。

ただ、相手も俊敏な野生動物である。そういうた狩りはほとんど失敗に終わった。とにかく、迂木は動きが緩慢なのだ。それに、光弾は発射されれば一直線にターゲットに向かって飛んでいくが、禍々しい妖気の気配があふれ出るので、危険を感じ取った動物たちはたちどころに逃げてしまう。

なので、俺たちが動物の肉を食いつ機会と言えば、運よく漁られて

いない死体を見つけたときくらいのものだ。いつもは虫を捕まえて食べる。地面に埋まっているイモムシなどを食べることが多い。迂木が妖氣をこめて足をふみならすと、びっくりして地表に出てくるのだ。アリの巣なんかも狙い目である。

ただ、こうして今では死体だの虫だと平然と語れるが、最初はやはり相当の抵抗があった。現代日本で暮らしていた俺にとって、そんなゲテモノを食べるなんて無理だと思った。しかし、食わなければ飢えて死ぬ。またもにエサが取れない時期だつてあるのだ。いつも十分にすべての子ガメにエサが行きわたるわけではない。子ガメたちもそれがわかっているから、他の奴らを押しのけてでもエサを独占しようとする。遠慮していたのは最初だけだった。バーゲンに群がる主婦がごとく、俺はエサをむさぼった。

俺はエサを独占するようなことはなく、収穫が少ないときは最低限自分に必要な分だけを食べたが、他のカメはそうではない。弱い子ガメは衰弱し、力尽きていった。それに、移動中はどうしても他の動物に狙われる危険が高い。迂木は必死に俺たちを守ってくれるのだが、いかんせん動きがトロすぎる。さつと飛び出してきた狐に咥えられていつた子ガメが何匹もいた。一瞬の隙をついて空から飛びかかってきた猛禽類に連れ去られた子ガメも何匹もいた。

『くーそー！　まーでー！』

迂木は子ガメたちに愛情を注ぎ、死んでしまったり食べられたりしたときは怒り、悲しんでくれる。が、それはじく短い間だけだ。

『まー、いーやー』

思うに、迂木はアホなのだ。一応、人間に近い感情らしきものはあるが、基本的に動物の本能に忠実に生きている。俺たちの種は多産型である。子を多く残して、次世代に命をつなぐ。子が多く死に、

わずかな生き残りしか大人になれないことは始めからわかっているのだ。迂木は例外的に長生きだったので妖怪化したようだが、もともとそう強い種というわけではないようだ。俺も長生きできれば妖怪化するのだろうか。いや、こうやって人間の記憶をもつてている時点すでに妖怪のような気もするが。

ところで、俺は雌ガメとして生まれてしまったようだ。ただ、雄とか雌とか以前にカメだしな。確率二分の一の結果だ。いまさらどうしようもないことである。

迂木は一百年くらい生きているらしい。たまに俺らと同種のカメと会うのだが、どのカメよりも巨大だ。長く生きれば生きるほど、体内の妖力が成長して強い妖怪になれるという。他の雌カメは、一度の子育てで最後まで育て上げができる子の数はだいたい1匹か、2匹といったところである。迂木はさすが妖怪、優秀であり、今のところ俺を含めて7匹の子ガメが残っている。

『かーしーこーいーのー』

迂木は俺のことを『かしこいの』と呼ぶ。まだ、名前をつけられてはいない。他の子ガメたちも『ちっこいの』とか『すべすべの』としか呼ばれない。

この迂木の言葉は“念話”という妖術らしい。テレパシーみたいなものだ。実際にしゃべっているわけではない。どういうわけか、俺は念話が使える。普通は妖怪化するくらい長生きしないと使えないそうだ。しかし、たまに生まれつき知能が高い突然変異のような固体がいるらしく、それかもしれないと言われた。迂木とは辛うじてコミュニケーションがとれるが、兄弟子ガメはまったく反応してくれない。

そうそう、能力と言えば、どうも俺には特別な能力があるようなのだ。それは『程度の能力』と呼ばれている。これは、妖怪であるとかそういうことは関係なしに、先天的にもつ裏ワザ的なチカラだ

といひ。実は迂木も『身を守る程度の能力』というものを持つている。そのおかげで長生きできたそうだ。

『程度の能力』を持つ者は、必ずとその効果と使い方を知る。俺の持つ能力は『注目を集める程度の能力』である。まじで使えない。以前俺が生きていた世界でなら使い道があつたかもしけないが、今の俺はただのカメ。いたずらに注意を惹くようなことをすれば肉食動物の餌食になってしまつ。

そんな殺伐とした野生ライフを送っていた俺は、ある日、ついに迂木から名前をもらつた。

『かーしーーーーーのー。おーまーえーのーなーはー……』

葉裏。葉っぱの裏と書いてヨウリと読む。俺の甲羅の色が濃い緑色だったのでそう名付けられた。日の光を浴びる明るい表側の色ではなく、暗くどんよりとした深い緑だったので葉裏である。

他の子ガメたちも立派な名前をもらつた。意味を理解できていないうちだが。カメ社会に名前なんて不要である。迂木は妖怪として知能を持っていたために、自分の子ガメたちに名前を与えるということをしてみたようだ。俺以外の兄弟たちはなんのことかわかつていない様子である。

迂木はアホなりに一生懸命名前を考えてくれたようなので、俺もこの名前を大切にしたいと思つ。

『じゃー、きょーかーらー、ひーとーりーだーちーしーてーねー』

え、なんですか？

3話「沢の巨木」

俺の体長は15センチくらいになつただろつか。ミドリガメくらいの大きさである。どうやら、カメ社会ではこのサイズになると独り立ちする決まりらしい。

マイビッグマザーからの突然の宣告に、茫然とする俺。兄弟たちは歩み去っていく辻木をピーピー鳴きながら追いかけた。向こうもカメだがこちらもカメ。両者ともに足が遅いが、圧倒的な歩幅の違いで辻木は森の奥へと消えていった。

それからの俺たちは死に物狂いだつた。日々、外敵から襲われる恐怖におびえて暮らした。カメ並みの脳みそしかもたない兄弟たちがうらやましい。俺は下手に人間の感性を持つせいか、毎日がハッピーバースデイ気分だよ。

のろまなカメが群れていたのでは敵の目につきすぎてしまう。俺たちは散り散りに別れた。それが、俺たち兄弟の別れだつた。その後どうなつたのかはわからない。

俺は森の中を少しずつ移動していった。いつもハラヘリ状態だつた。改めてマイビッグマザーの偉大さがわかる。この体では虫一匹捕まえることも困難だ。草をたべたべ飢えをしのいだ。

そして、ある日転機は訪れた。

鷹に強襲されたのだ。見つかつたと思ったときにはもう遅い。俺は慌てて甲羅に引っ込む。鷹は俺を捕まると空高く飛び上がった。

(まづい！ 死ぬうつー)

俺の自慢は甲羅のかたさだ。クチバシで突かれたくらいじや壊れない。しかし、鷹もそれをわかっている。辻木に教えてもらつたことがある。上空から捕えたカメをわざと落つことし、地面に叩きつ

けて甲羅を粉碎するのだと。そんなことされたら死んじゃうつてば。絶体絶命のピンチ。容赦なく鷹は爪を放した。重力の赴くまま自由落下の恐怖を堪能する俺。これまでの人生、いやカメ生が走馬灯のように脳裏をよぎった。俺はまた死ぬのか。願わくは天寿をまつとつしたかった。

俺が次の転生先はどうか人間でありますようにと祈つていると、甲羅に走る衝撃。だが、それはかたい岩場の感触ではなかつた。ごぼごぼと体が沈んでいく。水だ。俺を捕まえた鷹はドジつ娘属性でも有していたのか、うつかり俺を水場に落としてしまつたようである。

(ふう……なんとか助かつた)

それにしてもこここの水はきれいだな。森の奥深く、河川の上流域にまで来てしまつたようだ。澄み切つた美しい沢の中心に、天を突くような巨木が一本、立つていた。

この木はただの木ではないと、直感が告げていた。大きな力を感じる。しかし、それと同時に弱つていることがわかる。木は枯れかけていたのだ。病気だろうか。これほどの大きな木となると、何千年という樹齢があるかもしれない。

『だれ……か……たすけ……』

そのとき、念話が聞こえたような気がした。いや、間違いなく聞こえた。その声はなんと目の前の巨木から聞こえてくる。この木が助けを求めているのだろうか。もしかすると、この木は妖怪なのかな長生きすると妖怪になるのなら、植物にだつて当てはまらないとは言えないだろう。

(どうしたんだー！)

俺は念話で話しかけてみたが、答えがない。こちらに気づいていないようだ。俺が小さすぎて感じ取れないかも知れない。そうだ。こんなときこそ俺の能力『注目を集める程度の能力』を発揮すべきときだ。

俺は能力を使いながら再度呼びかけてみた。

『あな、たは……？』

今度はこちうに気づいたようである。

『ちいさきものよ……わたしは、やまいにおかされた……もうじき、しぬでしょう』

この妖怪は迂木よりも頭がよさそうである。俺の予想通り、病気のようだ。枯れている部分は幹の深くまで浸食しており、もう助かる見込みはないとのこと。

『しかし、いちまんねんをいきづけた、そのあかしをのこした
い……わたしの、ちから、を、あな、た、に……』

そう言つと、木は生氣を失つた。なんとなくだが、わかる。この木は死んだのだ。依然としてその姿は壯觀なものだが、すでに亡骸となつた。そして、遙か高みにある枝から一つの実が落ちてきた。ちょうど俺の前で止まるようにしてころころと転がつてくる。

その実は琥珀色に光つていた。文字通り、輝いているのだ。圧倒的な妖力を感じる。極限まで練り上げられた妖力の渦がクルミほどの大ささの実の中に閉じ込められている。これは、この木の力のすべてが詰まつた物だ。一万年分の成長した妖力が余すところなく凝縮されている。

え、これって、ものすげー、タナボタじゃね？

(木さん、ありがとうー キミの死は無駄にはしない！ パクッ

……うめええええー！)

というわけで、おいしくいただいた。前世も含めて、今まで食べた物すべてを超えるほどのおいしさだった。あつという間に果汁の一滴も残さずに完食した。

その直後だ。俺の体の中にとんでもない量の妖力がみなぎつきた。この力さえあれば、もう何も怖くない。捕食者の存在に怯える必要もなくなる。これで俺も妖怪に……あれ？ なんだか、体の調子がおかしい。手足が動かない。どうなってるんだ。

『あは、あははは、あはははっ！ ばかね、わたしのちからが、ただでにはいるとおもったの？ もう、あのからだは、つかえなくなってしまった。こんどは、あなたをなえどこにして、せいちょうするわ』

(ナニイイイー！?)

ですよね。そんなうまい話、あるわけないか。

どうやら、病気で死にそうになつた巨木さんは、自分の体を捨てて新しい種を俺の体に仕込んだらしい。莫大な妖力の影響によって、種は俺の体の中で急成長を始める。

(いたい、いたい、いたいイイイー！)

体中に激痛が走る。俺の腹の中で異物が大きくなつていく。根が内臓に食い込み、四肢の末端まで浸食される。普通ならとっくに死んでいるだろう。だが、俺は死ぬことも許されず、終わらない激痛

に苦しみ続ける。俺の体内に張り巡らされた根っこは完全に根付き、俺は全身を支配されてしまった。

それが終わると、次は“芽吹き”が始まる。腹の種が膨れ上がる。やばい。今度こそ死ぬ。//シシミシと音を立てて俺の白蟻の甲羅が悲鳴をあげる。

(こきやああ、ああ、あがあああつー)

『あはは、あはははっ！ わたしのえこひになつてね』

ついに俺の甲羅は碎けた。内側から押し上げてきた種の芽が、俺の背中から飛び出す。逆に腹側からは根っこが飛び出し、地面の奥深くへと伸びていく。そして、俺の意識は静かに暗転していった。

4話「睡覚の」

『タスケテ！ タスケテ！』

だれかの声がする。この声はどこかで聞いたことがある。さて、俺はだれだつたつけ。そうそう、葉裏だ。

俺が見た最後の記憶。できれば思い出したくないほどグロテスクな死に様だった。ということは、俺はまた転生したのだろうか。そついえば、この声は何だ？ 脳内に響いてくる。

『タスケテ！』

(だれだよ、あんた。俺は眠いんだ)

(ここは暗い。体も動かない。意識だけが鮮明だ。そして、俺の体の中に熱い何かが流れ込んでくる。そこで気がついた。熱い。体が焼けるように熱い。

(あちひー、あちちちーー。なんだ、なにが起こってるんだ？)

俺の目が覚めたのも、この熱さのせいだ。血管に溶けた鉄を流し込まれているような感覚である。もうこんな拷問はたくさんだ。確かに俺は前世で徳を積むようなことはしなかったが、こんなひどい目に遭わされるような業も積んだ覚えはない。

『ニーナンゲンガクル！ ロロサレル！』

この声、どこかで聞いたことがあると思ったら、俺に寄生しやが

つた巨木妖怪じゃないか。俺はまだ生きているのか？

俺は自分の意識を集中させる。ここは、俺の体だ。体中に木の根が張り巡らされている。なんだか、成長しているような気がするな。俺は寄生されながらも生きていた。いや、巨木に生かされていたのか？

俺の背中からは幹が生えている。意識は俺の体を離れて、そこをずっと上に登っていくことができた。今の俺はヤドリギと一心同体になっているのだろう。現在のヤドリギは、俺が最初に見たときの姿よりもずっと立派に育っていた。あれからどのくらいの年月が経つたんだ？

「よしやくたどり着いた。これが噂に名高いあの『見られずの靈樹・六島苞』か……」

「ああ、周辺の森に張つてあった結界は厄介だったが、なんとかなってよかつたぜ。見ろよ、この大きさ、超一級品だ。こいつは金になるぜ」

ふと、幹の下あたりに意識をやると、人間がいた。久しぶりに会つてみたはいいが、なんか悪人臭がするな。素直に喜べない。どうやら、この木を切り倒すつまりらしい。なるほど、それで巨木妖怪の奴は慌てているのか。

六島苞なんてかつこいい名前で呼ばれているようだけど。結界とか張つて人間対策はしていたようだが、破られたみたいだ。ざまあ、と言つてやる。さっさと切り倒されるがいい。

それで、六島苞の奴はさつきから何をしているんだ？

『コノカラダハ、モウダメダヨ！ タネヲノコサナイト！』

この体はもうダメだ。種を残さないと……って、こいつもしかし

て！？

俺は自分の体に意識をもどした。案の定だ。こいつは、自分の持つすべての妖力を俺の体に集めている。あのときと一緒にだ。樹木という体を捨て、すべてを果実に結集させて逃げようとしているのだ。体が熱かつたのは、妖力を流し込まれていたせいか。

(おい、こらー。人の体に何してんだ！？　俺は芋じゃねえぞ！)

『ジャマシナиде！　ミハ、デキタ。アトハ、タネ　ヨイ
レルダケ……』

実はできた、後は種を入れるだけ、ってどういうことだ？

そのとき、幹の上部に俺の意識が違和感を感じ取った。今度は何だ。意識を向けると、そこにコブのような物ができていた。それが、だんだんと根元に向かつて降りてくる。

よく調べてみると、それはなんと六島苞の命の結晶だった。そうち、これが種なんだ。実は果肉と種でできている。果肉には妖力がこめられており、種には六島苞自信の魂が宿っている。果肉の妖力を養分にして六島苞は成長するのだ。実を食べる者は、言つなれば土壤。そこに果肉の養分を振りまき、最上の苗床を作り出す。

前の六島苞と比べて、今は格段に妖力が上がっているのがわかる。そのあまりにも膨大な妖力は、枝に実らせることができないほど強大なため、地下に存在する俺の体を芋代わりにして妖力を蓄えていたらしい。あくどい。

つまり、種である“コブ”が俺の体に到達してしまえば、“実”が完成することになる。それだけはやめさせなければならない。つか、やめろ！

(とまれー！)

『ワッセ！ ワッセ！』

だが、俺は無力だった。俺と六島苞とでは、生命としての格が違うようである。俺の意識と違つて、六島苞の意識は“コブ”という形で実体化している。現に幹の中を移動しているコブを、実体のない意識の集まりでしかない俺が止めることはできない。俺自身の体もいまや六島苞の根っこに絡みとられて支配されてしまっている。抵抗はできない。

残す可能性として、実体のある連中に止めてもうしか他に道はない。つまり、人間たちに木を切り倒してもらうのだ。種は幹の中をゆっくりと下降している。根にたどりつく前に切り離してしまえば俺の勝ちだ。

『人間たちよ！ 俺の声を聞けい！』

「な、なんだこの声は…？」

俺は念話が通じないか試してみた。うまくいったようだ。人間たちは動搖している。

『俺の結界を破つたことは褒めてやろう。だが！ お前たちの思い通りにはならんぞ！』

「もしかして、六島苞がしゃべってるのか？」

「これは妖怪が使う念話といつ術だ。なるほど、こいつにも自我とこうものがあるようだ」

よし、次は俺の能力を使って、注目を集める。俺と六島苞は一同心体。つまりは、俺の能力の適用範囲に六島苞もいることになる。

俺は六島苞の魂が宿る結晶に“注目を集めた”。

「ん？ なあ、何か感じないか？」

「お前もか？ そうだな、存在感、とでも言えぱいいのか……あたりに強い気配を感じる」

「おお！ オレもそう思つてたんだ！」

「私は靈感があまり強くないのだが、それでも感じ取れるほどの大きな存在だ。幹の中に何かいいるのか？ ん？ しかも、幹の中をゆづくじと……下に向かつて移動していいか！？」

「ここまでくれば、後は俺の演技次第だ。頼むから、早く伐採してくれよ！」

『な、何を言つているのだ！ 下等な人間風情が！ 僕は何も隠してなどいないぞ！』

「なんだ、こいつ動搖し始めたな。ははーん、そうか、わかったぞ」

「なにがわかつたんだ？」

「これだけの存在感、おそらくこれは妖怪の“心臓”だ

「なんだそれは？」

「妖怪の核、魂みたいなものだ。こいつ、心臓をとられまいと地下に隠そうとしているのさ」

「なんだと！？　じゃあ、せつぞく切つけまわねえとなー。」

その調子だ！ やれ、ひとおもこにせつてくれ！

たが、問題は時間だな。ゆつくりではあると言つても、確實に口
づは降りてきている。早く切らないと手遅れになつてしまつ。

そこで、人間たちはチエンソーを取り出した。ブオブオとヒンジ
ンをふかせる。よつしゃ！ 文明の利器最高！ これならいける！

『まて！ まつてくれ！ 頼むからそれだけは……』

「いじにも都合があるんでな。悪いが、それはできねえ相談だ
！」

ブイイイイイギュアアアアツ！

とうとう幹に刃が入った。その振動は、俺にも痛みとなつて伝わ
つてくる。まだ、俺と六島苞はつながつたままなのだ。痛みも共有
している。しかし、ここで弱音を吐くことはできない。これも荒療
治だ。我慢我慢！

『ヤメテ！ キラナイデ！ イタイ！ タスケテ！』

……ちゅつと、可哀そつな氣もするけど、お前も俺にとんでもな
いことしてくれたからなあ。自業自得だ。

チエンソーはさして抵抗もなく、ずぶずぶと幹に食い込んでいく。
自分の体の一部を切り離される感覚はぞつとしない。田の前で腕を
ぶつ切りにされているようなものだ。痛みに気絶しそうになる。耐
えろ、俺……！

そして、メキメキとこつきしむ音がしたかと思つて、ビチャッ

と木が倒れる音が響いた。俺は自分の体の中に六島苞の存在を感じない。

（勝つた……！）

俺は勝利の味を噛みしめた。

5話「妖怪化」

「うわ、なんか幹から出てきたぞ。つかまえろー。」

「これが六島苞の心臓か。研究所に高く売れるぞー。」

地上では、人間たちの喜ぶ声が聞こえる。俺もおめでとうと一声かけてやりたいが、体がまだ動かないのでもじっとしておこう。しかし、ほどなくして辺りが騒がしくなってきた。

「なんだ、どうした!/?」

「妖怪だ! 森の妖怪たちが出てきやがった!」

「ちうー、妖怪封じのシールドがもたなかつたようだな」

「どうする、まだ六島苞の木材を切り出してないぜ!/?」

「……諦めよう。今の装備じゃ、やつあうのはきつい」

「ちくしょう、せつかくここまで来たってのにー。」

「いや、収穫ならあつたさ。六島苞の心臓を手に入れた。これだけでも田ん玉が飛び出るくらいの金になるぜー。」

人間たちは逃げるよつと帰つて行つた。六島苞は研究所といつところに売られるらしい。元氣でな。

その後、何かの気配がぞろぞろと俺の上に集まつてくるのを感じ

た。妖力を感じる。ということは、こいつらが人間がさつき言つて
いた妖怪か。こんなに大勢の妖怪と接するのは初めてのことだ。今
までに会つた妖怪は、迂木と六島苞だけだからな。

「六島苞様が切られてしまつたぞ！」

「なんということだ……これでは、森を守る結界がなくなつてしまふ」

「おのれ、人間どもめ！」

あれ？ もしかして、六島苞つて結構慕われてたのかな。こんな
に多くの妖怪に悔やんでもらえるなんて。そういうえば、結界を張つ
てたのは六島苞だったな。ということは、間接的にこの森の妖怪た
ちを守つていたということになるのだろうか。

あと、この妖怪たち普通に人語が話せるんだな。妖怪つてみんな
念話で話すのかと思つてた。

「……いや、待て！ 何か地中にいるぞ！」

「本當だ！ とてつもない妖力を感じる。これは六島苞の妖力だ
！」

あれあれ？ まずいぞ、俺のことがばれてる。

言わせて氣づいたが、俺の体にはとんでもない量の妖力がため込
まれていた。六島苞の芋にされていたせいだ。俺の体に六島苞の全
妖力が結集されていくことになる。

「切り株の下から感じる。六島苞様！ そこにおられるのですか
！？」

どうしよう。返事したほうがいいのかな。それはそれでやっこしくなりそうだし。

「六島苞様が我々に何か残してくださったのかもしれん。掘り起こしてみよう！」

うわあ、結局面倒なことになりそうだな、おい。

* * *

それから大勢の妖怪たちが集まつて、切り株を引っこ抜く作業が始まった。俺の体は相変わらず動かない。念話を使えば土の中からでも呼びかけることができるのだが、何と声をかければいいのかわからず、困り果てていた。そもそも六島苞とこの妖怪たちの関係ってどんなものだったんだ。

掘り起こし作業は難航したようだ。そりゃこれだけデカイ木である。切り株もでかい。根も広大にひろがっている。昼も夜も休みなく、妖怪たちは働いた。

三日目にして切り株の周りの土を取り除いていく作業がよつやく終了し、それから引っ張り上げるため、奮闘しているらしい。話を聞いていると、ここ原理で持ち上げてロープで引きずりだす算段のようである。

「オーエス！ オーエス！」

まるで祭りのような熱気で作業は続けられた。そして、5日目。ついにお披露目である。

「これが六島苞様の根っこか……」

「でっけえ岩がからまつてやがる。だからあんなに重かったのか」

「さて、この岩から妖力を感じるぞ」

「岩？ 今の俺は岩に見えているのだろうか。

それより、問題なのはこれからどうするかということだ。依然として体はがつちつと何かに拘束されるように固まつていて、ピクリとも動かせない。さすがに俺も焦つてきた。このままずっと固まつたままとか、ないよね。まさか、六島苞の呪いとか？

妖怪たちには、俺の姿はでかい岩に見えるらしい。絡みつく木の根を取り払い、水で洗つてくれいにしてくれたようだ。おざつす。

「さて、取り出してみたはいいものの、これが何なのかさっぱりわからないな」

「翡翠のように綺麗な緑色だな。欲深い人間たちならば、途方もない価値で扱うだろう。もしかして中に何か入つてゐんじゃないか？」

「……壊してみるか？」

「バカな！ 六島苞様のバチがあたつたらどうするー？」

「もうひつにも掘り出したはったんだし、今さらじやねえか

『いやまたまでー』

『…………』

しまった！ 妖怪たちが物騒なことを言いだすから、つい念話で話しかけてしまつた。

「これは念話……！」といふことは、六島芭様なのでですか！？」

『あー、なんだその……俺は六島芭だつ！』

勢いに任せてつい口から出まかせを言っちゃった。

「おお！ 六島芭様は生きておられたのですねー！？」

いや、俺はまあ、六島苞であつて六島苞ではないというか『

「アーニー、何でここにいるのか？」

くせう、ここまできたら出まかせで全部押し切るしかない！

『六島苞と呼ばれた物は、俺の表層にすぎん。俺は強すぎる力を自ら封じ込めるために、あえてあのよだんな姿をとつていたのだよ！人間たちが表層部分を刈り取ったため、封印が解けてしまつたようだな』

「なんと！ そうでありましたか！ さすがは六島芭様です！」

半分以上嘘だが、いいや。どうせ、ばれやしないさ。
だが、いつまでも六島苞様と呼ばれ続けるのはさすがに嫌だな。

『その六島苞という名だが……それはあくまで俺の表層につけられた名前だ。俺の名前は葉裏といつ』

「そつでございましたか。失礼いたしました、葉裏様」

『うむ。それで、俺は長らく眠りについていたので、最近の事情について疎い。といふか、ぶっちゃけあんたら、だれですか?』

「ええ!? 我々のことを覚えてないのですか?」

『お前たちと接していたのは、表層だからな。俺自身は眠っていたのだ。まず、俺がどれだけの時間眠りについていたのか知りたいな』

「さようですか。しかし、そう言われましても、六島苞……葉裏様は我々のような有象無象の妖怪とは一線を画する存在であります。どれだけの悠久の時を生きてこられたか、我々には想像だにできません。少なくとも数千年はくだらないのではないでしょうか?』

「どうも、かなりの時間、俺は冬虫夏草状態だつたよつだ。でも、確かに前に六島苞に会つたときは、一万年生きたつて言つてたな。少なくとも、それだけ分の妖力が俺の中にあるということになる。』

『で、人間がいるよつだな。奴らとはどういつ関係なのだ?』

「はい! 人間は我々妖怪の宿敵です! 傲慢なる人間は我々のすみかを脅かし、無秩序に森を切り開き、河を汚します! 駆逐すべき存在です! あらうことか、葉裏様に手をかけようとするとは、何と不届きな……』

『俺が結界を張つていたはずだろ? それはどうなつた?』

「葉裏様の結界は永らくこの森を守護してくださいました。人間どもも、手出しができないほどの強力なものです。我々は油断していました。人間は力ガクという恐ろしい術を使います。おそらく、葉裏様の結界は人間の力ガクの力によって破られたのではないかと思われます」

妖怪の妖術と人間の科学が対峙する世界なのか。六島苞つてめちや強い妖怪なんだろ？ その力を無効化するとか、人間側強すぎじやね？

『結界を破られた原因はわかつたのか？』

「はい。この森の結界は葉裏様の“小株”によつて形成されています。一か所だけ、小株が枯らされていました。何かの薬を使って小株を攻撃したでしよう。人間の薬は植物に多大なる被害を与えます。普段は小株を見張る妖怪がいるのですが、警備の隙を突かれました。面目次第もありません」

なるほど、六島苞の小株で結界は作られていたのか。なら、あの人間たちは草枯らしでもまいたのだろう。植物系妖怪の弱点を突いたわけだ。

『六島苞……俺の表層は強かつただろ？ 人間たちに対して結界以外の対抗策はなかつたのか？』

「ええ、六島苞様は確かに強大な力をお持ちでしたが、それは守りの力でした。この森は人間の都に最も近い妖怪の拠点です。人間の都から発せられる“力ガクブツシツ”によつて、通常なら枯れ果ててしまうはずの森を、六島苞様が結界の力で浄化させていたのです。我々がここに住めるのも六島苞様の結界のおかげでした」

六島苞の妖術は戦闘向きではなかつたようだ。拠点を作るのには優れているが、一度内部に侵入されると手出しができなかつたのだろつ。

なんかやばい気がしてきた。六島苞、性格は悪いけど、妖怪の社会に貢献してたんだな。どうしよう、あつさり死んじやつたよ。

「そういうわけとして、今、この森には結界がない状態なのです。お田覚えのところ、申し訳ありませんが、なにとぞ新しい結界を葉裏様に作っていただきたいのですが」

『え？ あー、結界？ ハハツ！ 結界ね、結界！ ……ちょっと、無理かなー、なんつて』

『え……』

妖怪たちの顔は見えないのだが、辺りがざわざわと騒がしくなる。それもそうだ。いきなり自分たちの住む森が安全ではなくなると言われたのだから、動搖しないわけがない。

「な、なぜなのです！？ 警備を怠つた我々への罰でしょーか！？」

？

『いや、そうじゃない。あの結界を張つていたのは確かに俺の表層だが、その表層である六島苞が死んだのは事実だ。今の俺には結界を張る術が使えない』

これは正直に話すしかない。使えないものは使えないのだ。嘘をついてもすぐにわかる。妖怪たちは絶望したかのよつた悲鳴を上げ始めた。ど、どうしよう……

「で、では、この森はやつおしまい、なのでしょ？」「うか……？」

۷

「Iのまま人間に追い立てられるがまま、I-Iを立ち去るしかないとおっしゃるのでですか！？」

10

「葉裏様！ 我々はこれからどうすればいいのですか！」

「ああ、六島苞様が生きてこられたのなら、こんな思いはしないでもすんだのにー。」

10

「もしかして、葉裏様は六島芭様と同一の存在ではないのですな
いですか?」

『な、なにを「ンキョ」にソソナ!』といつー。』

「そうだ、六島芭様と葉裏様が同じ存在だというのなら、どうして同じ結界の術が使えないんだ！ おかしいじゃないか！」

『だから、それは俺の表層がだな……』

「表層、表層ってオラたちには意味がわからんねえよ！」もつとわ

かるように説明してくれ！」

「やつだ！」やんとした説明をしるー。」

「あなたはこの森を守る存在ではなかつたのですか！？」

「俺たちはあんたのことをずっと信じてきたのに」「

ええい、うるせー。なんだこいつらは。政治家にクレームをつけ
るプロ市民か。

妖怪たちの訴えはだんだんとただの罵声になっていく。いい加減俺も頭に血が上ってきた。好き勝手に言いやがつて。俺に何の責任がある。俺はただ生きようとしただけだ。だいたい、お前たちが文句を言うべき相手は俺じゃないだろ。お前たちの敵は人間じゃないのか。

俺は能力を使つた。それまで怒鳴り声をあげていた妖怪たちは、ぴたりと声を止めた。一斉に俺に視線が集まる。皆が俺に“注目”した。

『ぴーぴー泣きわめくんじゃねえよ、お前らは生まれたての子が
メカ!? いつまでも六島芭様が守ってくれるからこの森は安心だ
あ!? 甘つたれるんじゃねえ! お前らはいつまで六島芭のすね
をかじる気だ!? 妖怪なんだろ! 強いんだろ!? だったら、
立ち向かえればいいじゃねえか! 人間どもをブツ潰してやればそれ
で済む話だろが!』

俺はマイビッグマザーを思い出した。小さな俺たち兄弟を残して

去つて行つた迂木。俺たちや所詮畜生だ。ボンボンおぼっちゃまじやあるまいし、泣きわめけば誰かが助けてくれるなんて考へること自体が間違つてゐる。

「で、でも、俺たちだけじゃ人間には勝てない……この森に妖怪が住めるのは、結界があつたからで……」

『六島苞は俺だつて言つただろ。あいつの力は、今、俺の中にある。あいつは結界術を使えたが、俺が使える力は違うのさ』

「葉裏様は、どんな力が使えるのですか！？ もしや、かつての六島苞様を上回るほどのが……」

『あなた。使つたことないからわからん』

「「「ズコーー..」」」

なんだお前ら、ノリノリじやん。

『だが、俺が強力なチカラを持つていることは確かだ。だつたら、対抗策はいくらでも立つ。そうだ』

妖怪たちは静かに俺の話に耳を傾けていた。俺の説得は無駄ではなかつたようだ。徐々に氣力を取り戻していく様子がわかる。

『人間なんてとるに足りねえ！ 俺ら妖怪の底力を見せつけてやるんだよ！ わかったか、野郎ども！』

「「「ウオーー..」」」

「うして、俺はこの森をまとめる妖怪の親玉になつた。
つて、なんだよ！？」

ちょっと熱くなりすぎたと思ったら、いつの間にか俺は妖怪のリーダーになっていた。

もともとそんな気はこれっぽっちもなかつたのだが、乗りかかつた船に乗らされてしまった感が否めない。まあ、六島苞に対する罪悪感も少しあつたのかもしれない。この力はもともとあいつの力だ。あいつはこの力をこの森を守るために使つていた。それはもちろん打算があつたとは思うが。力は持つだけで責任を生む。俺にはこの森の妖怪たちをあおつた責任もあるのだ。その言質くらいくつちり自分で面倒みたいと思うのだ。

はつきり言つて、六島苞の力を奪つたことを後悔なんとしていい。奪われた方が悪いのだ。もともと自分の力ではないからと見て遠慮する気もない。これは紛れもなく、今の俺の力に他ならないのだから。そして、六島苞の背負つてきた物を俺が引き受けなければならぬ義務感なんてものは微塵も感じていらない。

正直な話、これはただの傲慢なかもしない。俺がちっぽけなカメだつたころ、生きることに必死でそれ以外のことなんて考えている余裕はなかつた。しかし、今はこうして何の因果か有り余るほどの力を手に入れた。その余裕があるから、なんとなく、妖怪のリーダーという重役を引き受けてしまつたのだろうか。

まあ、そんな俺の気持ちの話はさておいて、妖怪の森は人間との決戦に向けた準備に入つていた。元人間として、妖怪と殺し合うことにためらいはあるのかというと……ない。不思議なものだ。人を殺すことに嫌悪を感じない。善良な人間を進んで殺したいとは思わないが、その程度の感情だ。妖怪にとって、人殺しは種族的な禁忌ではない。むしろ、人間は科学が発達する以前まで妖怪の食糧にされていた。俺はやはり、身も心も妖怪になつてしまつたということ

だろうか。

結界がなくなつて森はじわじわと化学物質による汚染を受け始めている。早急に都を襲う作戦を立てなければならない。

だが、その前に……

(いつになつたら、俺は動けるようになるんだ?)

俺が親玉に就任してから三日、いまだに体を動かすことができない状況が続いている。妖怪たちには、封印が解けたばかりで慣れていないだけだと言い訳してきたが、さすがにそれも限界だろう。この三日、俺は自分自身の体を徹底的に調べていた。そして、わかつたことがいくつかある。

まず、俺が動けない理由。それはそう苦労せずに判明した。原因は甲羅の重さだ。なぜか、俺の甲羅がめちゃつくめちゃ巨大化している。全長10メートルくらいである。そのせいで重すぎて動けないのだ。

さらに、甲羅の大きさは巨大化したのに、肝心の俺の体そのものは大きくなつていないのである。いや、正確には大きくなつていなければいけではない。15センチのミドリガメだったころと比べれば格段に成長している。1メートルちょっとくらいにはなつているような気がする。しかし、それでも甲羅の大きさと比較すれば極小と言わざるを得ない。したがつて手足が外に出せない。体がすっぽり甲羅の中に埋もれてしまっている状態なのだ。

なぜ、こんな体になつてしまつたのか。その原因も自分なりに仮説は立つた。

マイビッグマザーは妖怪だった。一百年生き続けて妖怪になつた。もし、俺の妖力成長率が迂木と同程度だとすれば、俺は確実に一百歳を超える年月を生きていると計算できる。それほどまでに俺の妖力は成長していた。迂木の体の大きさは軽自動車くらいあつたが、俺の体はせいぜい1メートル。確かに体長で言えば迂木の方が大き

かつたが、内包する妖力の量では俺がまさる。かつての記憶と照らし合させて見ても、明らかに俺の妖力の方が大きい。

それは、六島芭の妖力を取り込んだのだから当然だと言われそ
うだが、少し待つてくれ。さっきの話は六島芭の妖力を抜きにした話
である。つまり、俺自身が一つの個体として長い年月を生きたため
に得ることができた妖力についてのことだ。

では、六島芭の妖力はどこにいったのかといふと、それが問題で
ある。なんと、すべて俺の甲羅にため込まれていた。すなわち、俺
の肉体は俺自身が得た妖力で成長したが、俺の甲羅は六島芭の妖力
を詰め込まれた結果、ぱんぱんに膨れ上がってしまった、というわ
けである。そのため、肉体と甲羅との間の成長に不均等が生じたの
だ。

この不均等を解決するため方法は一つしか思い浮かばない。甲羅
の妖力を俺の肉体に移し替えるのだ。そうすることで甲羅は縮小し、
ちょうどいいサイズにもどる。

六島芭の妖力を自分の体に取り込むことについては問題なかつた。
長い間くつづいていたせいか、取り込んでも違和感はない。しかし、
大変だったのはその量である。とにかく、甲羅の中の妖力が多い。
どれだけ肉体に移し替えても小さくならない。いくら拒絶反応が出
ないからと言っても、常時輸血状態ではさすがに気持ち悪くなつて
くる。しかも、このエネルギーは熱力学の法則に忠実なようで、エ
ネルギーが高い方から低い方へと移動しやすい性質があつた。その
ため、気を抜くとドンドコもつさり妖力を甲羅から肉体へ送りつけ
られてしまう。妖力の移動は細心の注意を払つて少しづつ行わなけ
ればならなかつた。

「なんだか、葉裏様の体が小さくなつていないか？」

「え？ た、確かに心なしか縮んだ気がする……葉裏様、いかが
なさいましたか！？」

『だ、大丈夫だ、気にするな……ゲフツ！』

その後も順調に移し替えは進んだ。確実に甲羅の大きさは小さくなっている。だが、なぜか俺の肉体の方はどれだけ妖力を吸つても肥大化しなかつた。妖力の多さが体長と比例しているわけではないのか。

どんどん小さくなる俺を見て、妖怪たちが心配している。とりあえず、動きやすいように姿を最適化していると言つておいた。そして七日目。俺はついに日の光を拝むことになる。

「う、うう……」

「葉裏様！」

妖力の摑りすぎで頭がくらくらする。俺の周りには妖怪たちが集まっているようだ。

「なんとか、外に出られたみたいだな……あれ？ 俺、人語を話せるぞ？」

カメだったときは当然、人の言葉など話せなかつたが、妖怪化した影響だろうか、ちゃんと言葉を発音できる。まあ、喋れて困ることはない。

「どうだ、これが今まで封印されていた俺の真の姿だ！」

今の俺は、きっとマイビッグマザーのように美しいカメにバージョンアップしているはずだ。妖怪たちもあまりの神々しさに絶句して……

「 「 「 …… 「 「

絶句している。なんだ？ 思っていた反応と違つ。俺の姿はどうなつてゐるんだ？

少しずつ光に慣れてきた田で、自分の姿を確認する。甲羅は暗緑色で宝石のように輝き、手足は真っ白すべすべでふにふにした肌である。

「えつー？ ちょっと待て！」

俺は一足歩行で駆け出し、近くの水辺へと向かう。そして、水面に映る自分をその目で見た。

少女だ。美少女がいる。甲羅と同じ深い緑色の髪に瞳で、整った顔立ち。肌は陶器のように白くなめらか。そして、何より目立つのは甲羅だ。体がすっぽり甲羅の中に収まっており、それぞれの穴から頭と手足が出ている状態、つまり、ガメラの着ぐるみでも着ているかのような格好なのだ。

「なんじや」「つやあああああーー？」

俺の精神はかつてない大ダメージを受けてしまった。

7話「戦いじゃないじゃない」

整理しよう。

聞くところによると、長い年月を生き、妖力が高まつた妖怪は元の姿とは異なる形へと体を変化させることが多いらしい。これは自分の種族の普遍的な形状という範囲に固定されていた肉体と、妖力によって強靭になつた精神の間で乖離が生じ、その違いを中和するために起つる現象のようだ。人型に体が変化する者は割と多い。だから、俺の体が人間っぽくなつたことはそう珍しいことではない。

どうして、美少女に変化したのか気になつたが、そういえば俺は雌ガメだつたし、さらに言えば、実は前世でも子どもの頃はこんな容姿をしていた。小さいころはよく女と間違われたものだ。もうとつもなく昔の記憶なので、すっかり忘れていた。

そこまではいい。納得できる。問題は、俺が完全に人化しなかつたということだ。甲羅が残つている。非常に間抜け。

「だあああ！　ちくしょおおお！」

「葉裏様、落ちついてください！」

想像してほしい。幼い少女がカメの甲羅をすっぽり着用している姿を。かつて悪すぎる。すごくかつて悪い！　俺はどうしても我慢ならなかつた。どうして、100%人間か、100%カメの体になかつたのだ。なぜ混ぜたし。そんなハイブリッドは要らない。そういうえば、前世の世界のアメコミに、忍者で亀のミコータントが登場する作品があつた。あれの中途半端なコスプレ状態である。

さらに、この甲羅、クソ重いのである。ものすっごい肩が凝る。俺がプレスをきめると、地面が陥没する。軽く歩くだけでズシンズ

シンと音がする。少女姿の俺がトコトコ歩くその擬音がズシンズシンだぞ。能力なんて使わなくても視線を一人占めだ。そんな物を背負つて肩が凝るくらいくらいですむのだから、俺も強くなつていいのだろう。しかし、それとこれとは話が別。俺はこの甲羅をなんとかできなか必死に摸索した。

だが、うまくいかなかつた。甲羅は背中側と腹側の一いつのパーツがあり、どうにか分離できないか試してみたが、だめだ。この甲羅も体の一部である。引っ張がすことはできそうにない。甲羅の妖力をもつと吸い取つて小さくできないか試してみたが、一向に変化がない。それに俺の現時点での肉体の容量では、これ以上妖力の移し替えはできそくになかつた。妖力の飽和状態で吐きそうになる。それが已然の問題として、甲羅が小さくなつたところで取り外すことができなければ意味がない。まったくの無駄骨だつた。

しかし、俺は諦めていない。何が何でもこの甲羅をはずしてみせる。それから、俺は人間との戦いなどそつちのけで、甲羅との戦いを繰り広げることになる。

検証その1：高所からの落下

「いくぜっ！　おらああああー！」

俺は高い崖の上から躊躇することなく飛び降りる。一瞬の浮遊感。そして、急速落下。地面に激突する前に、手足と頭を甲羅の中に引っ込める。ちなみに、どういうわけか甲羅の中は質量保存の法則を無視するかのような無限スペースになつている。どう考へても人体では構造上不可能な動きでにゅるんと甲羅の中にもぐりこむことができた。手に物を持ったままで中に入れる。しかも、その物を甲羅の中に入れっぱなししておくことができるのだ。まるで、四次元ポケット。便利である。

そして、崖から飛び降り甲羅の中に避難した俺は、見事崖下に着

地する。すさまじい地響きがおき、隕石でも落下したかのよつなかレーターができる。だが、甲羅は無傷。

検証その2：崖上から岩を落とす。

「「いやっ！ おらああああ！」

今度は妖怪たちに協力してもらい、崖の上から巨大な岩を転がして落としてもらった。その崖の下に俺がいるという寸法さ。岩は俺の甲羅に直撃した。殻の中に引っ込んでいた俺には、岩が落ちる音は聞こえたが、直撃を受けたというのに何の衝撃も感じない。むしろ、生き埋めになつたことの方がこまつたが、その岩は片手で持ち上げることができたので、無事脱出できた。甲羅に比べれば断然軽い。

検証その3：火あぶり

「やけやつ！ わらああああー！」

妖怪の中には、妖術によつて火を起こせる奴が何匹かいた。そいつらにあつたけの炎を出してもらい、甲羅を焼く。これがほんとの甲羅干しだ。

甲羅の中には、まったく熱さを感じなかつた。10分くらいこんがり焼かれたが、やはり無傷。先に妖怪たちの妖力の方が尽きた。俺の背中のマイホームは、安心の耐火設計のようである。

他にも様々な苦行を自らに科したが、甲羅の防御力はそのことごとくに耐えきつた。六島苞の妖力が詰め込まれた結果、妖力が結晶化して金属を超える硬度になつてしまつたみたいだ。美しい緑色の光沢は色褪せることがない。

ところで、妖怪たちは俺のマゾ苦行を見て、なぜか士氣があがつ

ている。検証によつて様々な攻撃をことごとく跳ね返した行為は、俺の力を見せつけるパフォーマンスになつたようである。事実、防御面に関しては今のところ不安はない。攻撃面でも以前に増してかなり強化されている。少女の見た目からは想像もつかないほどの怪力を発揮できる。この森には俺より強い妖怪はいないようだつた。

尊敬のまなざしで見られるのは面映ゆいところだが、なんにせよ士気が高まつたのはいいことである。甲羅については、現状では手出しできそうにない。そもそも、人間たちとの戦いに備えて本腰を入れていくか。だが、俺は絶対に諦めない。いつか、この甲羅を脱ぎ捨ててやる！

人化してから、俺は衣服を着ていない。はだかんぼうである。甲羅のせいで着物を着ることができないのだ。まあ、妖怪なんて大半が素っ裸の連中であり、別におかしくはない。甲羅のせいで露出している部分は頭部と四肢だけだし。だが、立ち上ると常にガニ股猫背の姿勢を強要されるのはいただけない。まるで四股を踏む相撲取りの「」ことである。すべて甲羅のせいだ。忌々しい奴め。一足歩行は早く移動できて便利だが、甲羅の重さが尋常でないので長時間立ちっぱなしでいるのはきつい。なので、いつもは寝つ転がっている。

そのうち、寝たまま移動する手段はないものかと考えつき、手足をひっこめた状態で転がりながら走る“甲羅ローリング走法”を編み出した。坂の上から転がると、障害物をなぎ倒しながら進むことができ、爽快である。攻防一体のなかなか使える技だ。

それはさておき、人間との戦について。とりあえず、情報を集めることが先決だ。人間の都がどのような防備を持っているのか知らないと仕掛けることもできない。鳥型の妖怪を編成し、偵察部隊を作つてみた。彼らが集めた情報によると、都は“シールド”と呼ばれるもので守られているらしい。これは結界のようなあやかしの技ではなく、科学的に作られたエネルギー・フィールドであるようだ。科学と妖術の相性は悪い。物理法則によつて徹底的に理論武装された科学技術は、妖術のよつなんなどかわからぬ曖昧な力を強く拒絶する。妖術でこのシールドを破壊することは難しいという結論に至つた。

シールドを破るためにには、物理的な方法で攻撃するしかない。幸いにも、シールドは対妖術に重点を置かれた設計になつてゐるのか、強い衝撃に対してもそこまでの耐久力を持たない。なぜ、シールド

の性質がわかるのかというと、以前、森に入ってきた人間が個人用の簡易シールド形成装置を装備していたことがあつたらしく、そのときの経験から推測できたという。力押しに弱いようだ。

人間側は妖術さえ無効化できれば、妖怪など恐るるに足りないと思つてゐるようだ。まあ、その考え方はずつともである。妖術を封じられれば、あと俺たちに残された手段といえば怪力くらいのものしかない。例外的に、『程度の力』に関しては、シールドの防御効果も薄いという。だが、能力持ちは数が少ない。俺も含めてこの森に、5匹くらいしかいなかつた。それに、必ずしも戦闘に役立つ力ばかりではない。俺みたいにな。

となると、後は兵の数を集めて正面突破するくらいしか方法はないわけだ。人間側もその手は十分に予想できるので、対策もされているに違いない。詰んでないか、これ？

「うぬー、だめだ。うまくいかない」

今、俺は人間に対抗するための兵器が作れないかと模索している。といつても、この森にある資源と言えば木材しかない。さすがに鉱脈が都合よくこの地にあるといふこともなかつたし、砂鉄があるとしてもそこから精製するなんてやり方も俺は知らない。木でなんとかするしかない。

とりあえず、俺は投石機が作れないか試案してみた。だが、俺は投石機の詳しい構造なんて知らない。なんとなく形は思い浮かぶが、それを現物にすることは話が別だ。まずは小さな模型を作つているところだ。それが完成したら、本格的な製作に取り掛かるつもりである。

しかし、うまくいかない。どうやって作ればいいんだ？

「葉裏様、何を作つておられるのですか？」

「ん？ これは投石機といつてな。大きな岩を遠くに飛ばすための道具だ。これをたくさん作れば、遠くからシールドを破壊することができるかもしないだろ？」

「ほう、そのような道具があるとは知りませんでした」

「いや、俺も詳しく知らないから、今試案中なんだ。といつか、煮詰まっている。手を貸してくれ」

そう言つてみたが、妖怪は難しそうな顔をするばかりだ。

「葉裏様、まことに言いにくいのですが、その投石機というものは人間の作る道具ではありませんか？」

「確かに、そうだな。それがどうした？」

「“道具を作る力”は人間の領分でござります。我々妖怪には、複雑な人間の道具を作ることはできません」

人間と同程度の思考力を持つていれば道具の作成くらいわけないと思つていたが、どうも違うらしい。妖怪は種族的にモノを作るという行為が苦手なのだそうだ。実におかしな感覚だが、言われてみれば確かにと思う節がある。かれこれ数日は投石機の製作に頭を悩ませていたが、一向に良い案が浮かばないのだ。これは妖怪の性分なのか、それとも俺の頭がアホなのか。

妖怪は便利な道具を手に入れようと思つたら、人間から奪うことしか得られない。中には鍛冶が行える妖怪などもいるそうだが、それでも都のような科学技術には到底及ばない文明レベルの品である。この妖怪の不器用さが、人間にすみかを追われる敗因になつたのだろう。

「それだと、本当に正面突破しか他に方法がなくなつたな。援軍動員して量産させることなんて到底できそうにない。投石機は諦めるしかないか。」

「それだと、本当に正面突破しか他に方法がくなつたな。援軍の要請はどうなつた？」

この森にいる妖怪の数はせいぜい、1500匹程度である。それに対して、人間の都にはその規模から見ても1万人くらいはいると思われる。圧倒的に数が足りない。妖怪一匹の強さは容易に人間一人を上回るが、それにしたつて少なすぎる。それに、人間には高度な文明によって生み出された兵器がある。武装した兵士なら、十分に妖怪とも渡り合える。そこで、援軍の要請は急務だった。

求めた先は、妖怪四天王と呼ばれる連中である。なんか、逆に弱そうに聞こえるがそんなことはないらしい。六島芭もその一匹だったとか。後の三匹も強豪揃いのようで、この森のようにそれぞれが拠点を構え、多くの妖怪を従えていたりするそうだ。今回の戦いに協力してくれるかどうか、打診してみた。

「はい、それが……色よい返事をいただけたのは、東の猪々獄様のみでございました」

「まあ、そんなもんか」

妖怪だから人間との一大決戦をやると言えば、血の氣の多い連中が集まるかと思ったのだが、現実は厳しい。一匹集まつただけでもよかつたと言える。はたして、猪々獄とやらがどれほどの軍勢をひきつれて来てくれるのか、期待してまつしかないだろう。

9話「気になるアイツはイカしたブタ面」

さて、それからしばらくした後、援軍がこの森に到着した。その様子は圧巻だった。なんとその数、5000匹である。百鬼夜行どころの騒ぎではない。地を埋め尽くさんばかりの妖怪たちがこの森へとやってきたのだ。正直、ここまで数をそろえてくれるとは思っていなかつた。嬉しい誤算である。

遙か東の地から旅をしてきた彼らを、森で受け入れ、休ませた。妖怪の森はかつないほどにぎわいを見せている。これだけの数が集まつたということは、おそらく人間に知られているだろう。500もの妖怪の行軍を隠すことなんてできない。軍を動かす以上、しかたのないことだ。六島苞が死んだことは人間側も知っているはずなので、拠点を失う危険を感じた妖怪たちが決起することは、向こうも予測していた可能性だろ？ 人間側も、妖怪たちが弔い合戦に来ると踏んで、戦いに備えていると想っていた方がよさそうだ。

俺は森の深部、六島苞の切り株が残る沢にいた。協力者である東の妖怪四天王、猪々獄に挨拶をするためだ。これだけの妖怪を引き連れて来てくれた彼には、感謝しなければならない。到着からほどなくして、猪々獄は現れた。名前からなんとなく予想がついていたが、ブタの妖怪である。

「よく来てくれた、猪々獄よ。俺はこの森をまとめる妖怪、葉裏だ。このたびの戦いに手を貸してくれることを深く感謝する」

「……お前は誰だブヒ？ この森の長は北の妖怪四天王、六島苞ではなかつたのかブヒ？」

猪々獄の見た目は、猪八戒のような感じと言えばわかるだろうか。

人間とブタを掛け合わせたような容姿をしている。背中には5本の大槍を担いでいた。腹周りはだぶついているが、腕の筋肉はモリモリだ。しかも、その体格はかなりのもので、背は5メートル以上ありそうである。見かけ倒しではなく、妖力もすごい。さすがは四天王を名乗るだけのことはあり、六島苞とタメを張るくらいの実力があると一目でわかる。妖力の多さで言えば、俺の方が勝っているようだが、戦闘力で言えばどちらが上かわからない。

でも、語尾にブヒをつけるのはやめてほしい。

「六島苞は俺の異称だ。これからは葉裏と呼んでくれ」

「ふん、クソでかい木の妖怪だと聞いていたが、実際会つてみれば、なんともまあちびっこい亀妖怪だブヒ。こりゃあ、人間にやられるわけだ！」ブヒヒヒヒヒ！

猪々獄の挑発とも取れる軽口に、援軍の妖怪たちが合わせて笑いだす。それを見たこの森の妖怪たちは、自分たちの親玉を馬鹿にされ、怒り心頭といった表情になっている。ここで喧嘩させれば士気にも影響がでる。俺は怒り出す妖怪をなだめた。

「まあ、そういう訳だ。これからともに人間と戦おうと言うのだ。仲良くやっていこうじゃないか」

「人間をぶつ殺すことに関しちや、異論はねえブヒ。そのために俺様のかわいい手下どもをあつめてやつたんだからな。だが、戦の前にはつきりさせておきたいことがあるブヒ。それは、俺様とお前、どちらが大将にふさわしいか、ということだ」

なるほど、それはもつともだ。トップが一人いたのでは、指揮系統が混乱する。混合軍を形成する以上、どちらの長の命令が優先さ

れるか決めておかないといけない。

猪々獄は、背中から槍を一本抜きとり、ぶんぶんと振り回してその槍先を俺に向けた。

「俺様と勝負しろブヒー。勝った方がこの軍の指揮をとる。ビツだ？」

俺としては、指揮権を猪々獄に譲つてやつてもいいと思っているが、この戦闘狂にそんな話は通じないだろう。それにここであつさり負けを認めると、それはそれでこの森にもともといた妖怪たちの士気が下がりそうだしな。

「いいだろ？ 受けて立つー。」

「ブッヒッヒー！ そつこなくつちやなあ。おら、お前は武器を構えなくていいのか？」

武器ねえ。正直、この森で調達できる武器なんて石器の斧くらいしかない。こん棒は俺の筋力をフルパワーで使って振ると一瞬で壊れてしまう。石器はそれよりも若干マシといった程度なので、使えるものがない。素手で殴つた方がまだいい。

「俺の武器はこの体一つやー。」

「上等だブヒー！ 俺様は東の妖怪四天王、猪々獄！ いざ、尋常に勝負つー！」

名乗りを終えた猪々獄は剛速の槍を突きだしてきた。はやい！

俺は反応できずにモロに突きを食らってしまった。俺の腹の甲羅装甲がその攻撃を防ぐが、突きの威力はすさまじく、体が後方に吹き

飛ばされる。

「ぐつぐつ！ なんて衝撃だ……！」

槍を食らった腹のあたりがジンジンと痛む。初めて肉体にダメージを通された。相変わらず甲羅に傷はついていないが、衝撃が内部まで届いている。このブタ、やりおる。

「……驚いたブヒ。まさか俺様の槍を無傷で防ぐとは！ それに、その体の重さ、はんぱねえブヒ。俺様の手の方が痺れちまつたブヒ。妖怪四天王の名は伊達じやねえってことか。ブッヒヒヒヒー！ このいつは面白くなってきたブヒー！」

今度は俺の方から仕掛ける。さつきは猪々獄の突きに対応できなかつたが、それは俺の経験不足が原因であつて、やろうと思えば素早く動ける。俺は猪々獄の懷に踏み込み、拳を放つ。

「くらえー！」

「はあー、なんだその攻撃はー、遅すぎるブヒー！」

「なにー？」

脂肪でたぷたぶの巨体のくせに、こいつは俺の拳を難なくかわした。確実に俺より速く動ける。それを認めなければならない。拳を突きだした俺の体勢は隙だらけだ。そこに鋭い槍が連続して襲いかかってくる。

「ちいいいいつー！」

俺は甲羅ガードで猛攻を耐える。ぐおう！ モーレツウ！

甲羅で防いでも自転車とぶつかつたくらいの衝撃は通る。地味に痛い。

パンチが届かないとなれば、他の手で攻めなくては。俺は妖力弾を放った。迂木が使っていた技と同じものだ。妖力をたんまりもつてている今の俺なら何発でも打ち出すことができる。妖力弾は確かに速い。しかし、威力が弱かつた。猪々獄に当たつても全然ダメージを与えた様子はない。相手も高い妖力を持っているので、当たる直前に相殺されているのだろう。それにほとんど避けられている。

「ふぬっ！ その甲羅は厄介だブヒ。ならば！ 甲羅以外の場所を狙うブヒ！」

今度は甲羅から露出している手足を狙ってきた。ま、当然だよな。こちらもその手は読んでいた。右腕目がけて突きだされた槍。俺は右腕を甲羅に収納する。

「な、なんだブヒ！…？」

「はっはっは！ そう簡単にやられるか！」

猪々獄は予想外の動きをされたことに驚いている。そこにわずかな隙ができた。今だ！

俺は甲羅の中に入れていた木の実を取り出す。これは、散歩中に見つけた物だ。蜜柑のような見た目をしているので、食べられるのかと思って少しかじってみたところ、壮絶な辛さに悶えることになつた。これは何かの武器に使えるかもしれないと思つて甲羅の中に大量に入れておいたのだ。

それを空中に放り、妖力弾で打ち抜いて炸裂させた。

「なんだこれは、うわあああ！　目がしみる／＼…」

果汁が周囲に飛び散り、猪々獄の目に入った。俺は頭を甲羅に引っ込みて回避した。よし、この隙に攻撃だ。

頭を収納しているので前が見えないが、前方に感じる猪々獄の妖力はわかるので位置は特定できる。そこ目がけて渾身の蹴りを入れる。

「ぐふ＼＼…」

やわらかい肉を蹴る感触がした。頭を出すと、腹を押されてよろめく猪々獄がいた。追撃しようとするべくさつと後ろに飛び退つかわされる。そう何度も奇襲は通用しないか。

「はあはあ！　やつてくれたな、子亀妖怪！　もつ容赦はせんブヒー！」

今の一撃は効果があつたようだが、猪々獄を倒すには至らなかつた。タフな奴だ。目潰しのせいで涙目になつて見えない視界もすぐに回復するだろう。

「当たり前だ！　最初から容赦なんかすんじやねえ！　全力で来い！」

これは長期戦になりそうだな。

10話「バトルの末に」

それから戦いは三日続いた。まじで。

猪々獄は執拗に俺の露出部を狙つてくるので、俺は甲羅に完全避難し、甲羅ローリング走法で戦つた。手足を引っ込めているので、殴る蹴るの暴行ができない。転がつて体当たりしても避けられるのが目に見えているので、ちまちまと妖力弾を撃つて攻撃した。たまたま激辛蜜柑攻撃を織り交ぜたりしたのだが、一度も通用する相手ではなかつた。

その攻防が三日も続いたのである。観戦していた妖怪たちは、最初の一日は固睡をのんで見守つていたが、今ではこの泥仕合の有様に呆れて退屈しているようだ。

戦いは俺が守りで猪々獄が攻めという形で延々と続いた。それにしても、猪々獄のやつ、なんて諦めが悪いんだ。疲労困憊でふうふう息をつきながらも、まったく手を休めることがない。5本あつた槍もすでに4本が苛烈な攻撃の負荷に耐えきれず折れている。俺は甲羅に閉じこもつて妖力弾を撃ち続けられればいいだけなので、楽なのだ。この際なので、甲羅ローリング走法を練習してみた。今では自由自在にブイブイいわせることができる。さすがに猪々獄の動きはそれより速いので、攻撃は当たられてしまうのだが、うまい衝撃の受け流し方がわかつてきたので、今では食らつてもそんなに痛くない。

「なあ、猪々獄。もうそろそろ俺の勝ちってことでいいじゃないか？」

「いいや！　はあ、ふう、まだだブヒ！　まだ終わらんブヒ！」

「ふひー！」

「だつたらお前の勝ちっことで、もういいからさ

「黙れブヒ！ 僕様は負けないブヒ！ 今に見ていろ！ こんな
甲羅、粉々に碎いてやるブヒー！」

パキン！

そのとき、何かが割れる音がした。最後の一本の槍も折れてしま
つたのか。

いや、違う。

「ちよ、ちよっと待つてくれ、猪々獄！」

俺は甲羅口ーリング走法で距離を取り、頭と手足を外に出した。
猪々獄の方を見れば、その手に持つ槍はまだ折れていない。では、
さっきの音は何だったのか、恐る恐る甲羅を確認する。

猪々獄の攻撃に耐え続けた甲羅は、以前と変わらぬ傷一つない美
しさで光っている。だが、背中側と腹側の二つのパーツのつなぎ目
に違和感があった。そこに手を当て、思いっきり引っ張る。

パカア！

「……開いた……」

まるでドアでも開くようにすんなりと動いた。どさりと甲羅が俺
の背中から滑り落ちる。俺は自分の体に目をやる。男だったころい
た相棒はなくなつており、胸はほんのりとふくらんでいる。いや、
そんなことより俺はその少女のおなかを見ることができたことに歓
喜した。それはつまり、俺の苦しみからの解放を意味する。

「とれた――――――！」

天に向かつて手を広げながら嬉しさのあまり絶叫した。全裸で。これで、もうかつこ悪くない。普通の人間と同じ姿だ。普通つて、すばらしい！

「ふ、ブヒヒヒヒ―― とつとつ俺様の攻撃がお前の自慢の甲羅を砕いたようだな！ もうお前を守る盾はないぞ！ くらえええ！」

俺が幸せをかみしめていると、猪々獄が槍を突きだしてきた。なんて無粋な奴だ。しかし、今の俺は確かに防御力が落ちている。あんなふつとい槍を食らつたら、さすがにただではすまないだろう。猪々獄が放つ渾身の一撃。俺はなんとかそれをかわそうと横に飛び。

ふ。

「……！ な、なんだ！？」

ぎりぎりで槍をかわし、牽制の拳を繰りだそうと思つていた。だが、自分の思惑とはまったく異なる事態が起きていた。回避のために行つた横つ跳びによつて、十メートルほど移動していたのだ。

(体が軽い……！)

どういうわけか、体が羽のように軽い。そうか、甲羅を脱ぎ捨てたからだ。甲羅分のウエイトがなくなつた今、俺は以前以上のスピードで動くことができる！

俺と猪々獄のスピードは互角になつた。しかも、相手は疲労している。勝機が見えた。妖力弾で猪々獄を足止めし、その隙に素早く後ろへ回り込む。

「これで終わりだ！」

「ぐぼつー、へばぶつー、ぐあああああー！」

俺のラッシュが猪々獄をとらえた。そして、長きにわたる戦いによつやく決着がついたのであった。

こうして、妖怪軍の最高指揮官は俺に決まった。猪々獄は副指揮官である。いかに妖怪四天王の一匹といえども、三日の大闘の疲労は色濃く、戦いの後はダウンして動けなくなっていた。

それから、甲羅について調べてみた。冷静になつて考えると、もしかしてブツ壊れてしまつたのではないかと不安になつたが、そんなことはなかつた。なぜか俺の体と分離しても妖力を失わずにいる。背中側と腹側のパーツが、二つにカバッと開く仕組みは便利なもので、これにより、甲羅は着脱可能になつたのだ。甲羅の中を覗き込んで見たが、光を当てても真つ暗で何も見えない。手を入れると、ずぶずぶとどこまでも沈んでいく。中に何か入つていたので取り出していくと、激辛蜜柑だつた。腐つていた。そつと中にめどした。どうなつてるんだ、この甲羅。

俺は甲羅を抱えて沢の水の中に入つた。やっぱり甲羅がないと動きやすい。肩も凝らない。実に気分爽快である。体を洗つていると、改めて女になつたのだなあと実感した。だが、特に感慨はない。周囲には妖怪たちがわんさかいるのだが、その中で全裸で水浴びしても、羞恥心など起こらなかつた。姿形は人間に似ているが、今の俺は似て非なる者なのだ。前世の頃の俺の感覚と、今の俺の感覚ではかなり違ひが出ているのかもしれない。自分では、はっきりとわからないのだが。

全裸森ガールとなつた俺が、仁王立ちで体を乾かしていると、猪

々獄がやつてきた。

「おう、体はもう大丈夫なのか？」

「ブヒヒヒ！ 僕様はそんなにやわじやねえブヒ。それにしても、まさかその甲羅が脱げるとは思わなかつたブヒ。僕様の負けだな。お前、強えじやないか。見なおしたブヒ」

猪々獄にさつきまでのトゲはない。自分が認めた相手には心を開くタイプなのだろう。戦いを乗り越えて友情が深まるといつやつか。

「いや、違うな。惚れなおした、言つた方がいいかもしれんブヒ」

「は？」

「俺の女になれブヒ。俺の子どもを孕めブヒ」

美少女とブタの化け物のカップリングつて、それなんてエロゲ。ドン引きだよ。もちろん、丁重にお断りした。拳を鳴らしながら、丁重に、な。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5878z/>

東方 龜兎忍

2011年12月19日19時47分発行